

和漢文操

行類  
序類  
翰類

三

5  
4710  
3

6  
7  
8  
9  
20  
1  
2  
3  
4  
5  
6  
7  
8  
9  
30  
1  
2  
3  
4  
5  
6  
7  
8  
9  
40  
1  
2  
3  
4  
5  
6

門 5  
4710  
3



和漢文操卷之三

○行類

△連能互照序

連二三四

或おわしきと此格句とあるに連能互照序  
の遺跡ありてはよきはるの味よく御のおも  
さしにけり播の香花じうあはれもつる相の  
行様よとて治方の新しきあるにけりもむね  
森かよふまにしにきりてあはれよく御の



和漢文

危翁のほとよまありて色辨よけ翁向とわたり  
我れの上よりとたり

櫛のうつららんやほしむと

時をさくも歌ふやあね

かくて危翁のほとよまありて色辨よけ翁向とわたり  
よ本はな情とぬくまきそと連歌之能諧と  
よねねと時をさくも歌ふやあね  
連歌といふ二章とさかぬくやめむとかくて  
まと言ふの余情とよと連歌とよと一虚字の  
之照りておとよまありて色辨よけ翁向とわたり

とを我とくも詞とす時をおよかつていふ  
して短歌のうけよとさかぬくやめむとかくて  
章と暗記してほらくは新のほとよまありて  
詠歌を詠ふはつらつと新詠あり時向の危翁  
いふにやとほとよと連歌といふ能諧ありつれと  
たの意ありつらつとさかぬくやめむとかくて  
けつて一連言とさかぬくやめむとかくて  
かつていふも一能諧と虚とほとよまありて  
目とあつてつらつとさかぬくやめむとかくて  
らつていふも一能諧と虚とほとよまありて

くら懐集の編書、誄語之連歌、如き  
 其の世の言篇の誄語師のほ奥、連歌の如  
 きの詞の誄語、あつて、誄言連歌の言を  
 とし、は、編書に、空を、今や人の編の誄語  
 の儒、を、其の誄文と、なり、併、と、禪家の  
 能言と、なり、て、歴々の、は、を、なり、は、  
 とい、松陵の誄文と、なり、歌と、なり、西の誄語  
 と、なり、小なり、て、又、師の世は、連歌の如き、誄語  
 の如き、あれ、誄語、も、連歌、あり、て、連歌、も、誄語  
 あり、は、ん、や、連歌、の名、と、歴々の、あり、て、なり、

海、か、よ、の、奥、後、あり、も、古今、集、の、あり、は、誄語  
 の、如き、あり、と、なり、今、も、連歌、の、あり、と、なり、人の、  
 あり、は、併、あり、と、なり、誄語、の、あり、は、誄語  
 の、誄、あり、と、なり、誄語、の、あり、は、誄語、の、あり、  
 の、誄、あり、と、なり、誄語、の、あり、は、誄語、の、あり、  
 の、誄、あり、と、なり、誄語、の、あり、は、誄語、の、あり、  
 あり、は、言、下、に、あり、は、誄語、の、あり、は、誄語、の、あり、  
 あり、は、言、下、に、あり、は、誄語、の、あり、は、誄語、の、あり、  
 あり、は、言、下、に、あり、は、誄語、の、あり、は、誄語、の、あり、  
 あり、は、言、下、に、あり、は、誄語、の、あり、は、誄語、の、あり、  
 あり、は、言、下、に、あり、は、誄語、の、あり、は、誄語、の、あり、  
 あり、は、言、下、に、あり、は、誄語、の、あり、は、誄語、の、あり、

古今集

二

名はとす用て所合をふ向ふりて  
 ぬむ時の用せしや連音の家とふら  
 能の解とまらしむて一書に書  
 とつねなる也やとむ書それ連歌と能  
 ぬらり和音の兄弟とさわし世に中  
 へく家もつねも解とけ所とのまら  
 連歌と能譜とも或と能譜と連音とも  
 て詩の人の花漢和と交るるくを  
 連音の情のさむとあひぬらり能  
 うつらとゆて連能一座の所合あ

のと地と南への行題して大和の  
 其むらとあし一節書の花と  
 人知とえたるくむらめ錦  
 むらとえとけ一解と和音減  
 うてらと一書廢のたてとや  
 人知のあらむとあしとやゆ  
 能譜の席よのさしてと和音  
 けらとやとけはのさとの  
 とりてとてとつと連能とあ  
 情のさむらとさむと山町と



通おちくくはあめ神也  
 けり此章とていりと  
 年とてにえ後のもも  
 そのひの宮此書とて  
 お膳と神書とをいれ入  
 便船とこちへ入り  
 小貝ひたふや汐の  
 おもとして  
 くく枯しきれ此高

二珠由純二  
 二珠由純二  
 二珠由純二  
 二珠由純二

時あつとも君に  
 お森とらきあ  
 写かりし  
 お厨とせりて  
 せんか  
 質んかのゆ  
 の差に  
 酢のか減の  
 嘆ひ  
 鐘の系

純由二珠由純二  
 純由二珠由純二  
 純由二珠由純二  
 純由二珠由純二

月に入朝の月影のあつたに  
 さいとをきい錦とるまふ  
 随分のまん中へまて 栞くつり  
 といふとあはれとくはれり  
 塵のし第もたそに 抱あひ  
 心やしあはれゆめあはれ  
 ぬやうい暖筆とそれは詩  
 といふとあはれゆめあはれ

純 由 珠 二 純 由 二 珠

○作者列傳

正珍は板木氏ニシテ伊勢ノ山田ニ師範トス連歌  
 八里村家ニ通称セリトツ庄年ヨリ家産ニ

抱ラス家法ハ建治ノ式目ニ據テカラ風美ハ宗祚ノ高  
 二遊ハ一生不羈ノ隱逸人ナリ「光純ハ其内ノ高才ナ  
 博ク孔内ノ詩書ニ通ヌ姓ハ木林氏ニシテ師儼ヲ家ト  
 セリ東堂ハ今ノ俳名ナリトフ乙由ハ同ク山田ノ産ナ  
 當時ニ俳諧ノ名近ナリ昔ハ東花坊ニ夜燈席シテ  
 新百韻ノ名ニ遊ニ中比ハ涼菟舟ニ鼓舞舞シテ正猿ノ  
 曲ヲ尽スニ集ハ俳諧ノ要ニシテ祖公羽後ノ時世赫ト  
 云々其後中川ノ家ヲ道テ今ハ木林ニ遊リトフ

△俳諧求韻序説

并短歌行

土方以立

眞儀抄云歌と韻字と用(とあり)二十一字



の歌と才と句の孫子と功約と一才みの孫子と  
 孫約と一約とつらももさくあふとと也歌とい  
 又七歌と才と句の孫子と功約と一才みの孫子  
 と二約と一かくあふとく約と一約とつらもも  
 ちくすと短歌といふ喜撰式かきし新撰髓  
 古今集よりかきたすと或云訪よりらうのほく  
 歌と我國の詞あり句とあふりわらもかきし  
 ひふのちり一短歌ハ賦あり長歌ハ五言の詩  
 旋歌より江南の曲混本より越調の詩連歌  
 ハ聯句あり迴文もかきしあふらふらふ

準ゆるふとありふありと也言短歌せふは  
 ありて真倭抄よりかき存よりあふらひ借し求  
 韻の何れあふらひ遠くも真倭抄より後とらひ  
 近くもかき文澄し假名の詩とありとととせ  
 又や連歌の聯句ありと他借しその韻字と  
 ともして俳諧と連歌といふ一とあふらひに  
 栢梁星の聯句あれはこあふらひに酒折宮の連歌  
 ありて漢武帝も日本武しけるの祖とあふらひ  
 せもく末韻の亦同と真倭抄も二種の韻例  
 ありて又句と兼韻とあり言詠と細韻とあり

兼韻とやまたまの音韻とひ細韻とをいひの  
言葉とよけり歌の束韻とを二行と納の尾に  
ありて短歌といひ長歌といひ兼及本といふ時  
短歌一準とす。絶句也

雙及本

以六句<sup>ラ</sup>互<sup>レ</sup>一絶<sup>ト</sup>才<sup>ト</sup>句<sup>ヲ</sup>終<sup>ル</sup>字<sup>ヲ</sup>互<sup>ニ</sup>初<sup>ル</sup>韻<sup>ト</sup>  
才<sup>ト</sup>六句<sup>ヲ</sup>終<sup>ル</sup>字<sup>ヲ</sup>互<sup>ニ</sup>終<sup>ル</sup>韻<sup>ト</sup>

あけりあけりあけりあけりあけりあけり  
あけりあけりあけりあけりあけりあけり

短歌

以五句<sup>ヲ</sup>互<sup>レ</sup>一絶<sup>ト</sup>才<sup>ト</sup>句<sup>ヲ</sup>終<sup>ル</sup>字<sup>ヲ</sup>互<sup>ニ</sup>初<sup>ル</sup>韻<sup>ト</sup>  
才<sup>ト</sup>五句<sup>ヲ</sup>終<sup>ル</sup>字<sup>ヲ</sup>互<sup>ニ</sup>終<sup>ル</sup>韻<sup>ト</sup>

あけりあけりあけりあけりあけり  
あけりあけりあけりあけりあけり

長歌

以四句<sup>ヲ</sup>互<sup>レ</sup>一絶<sup>ト</sup>才<sup>ト</sup>句<sup>ヲ</sup>終<sup>ル</sup>字<sup>ヲ</sup>互<sup>ニ</sup>初<sup>ル</sup>韻<sup>ト</sup>  
才<sup>ト</sup>四句<sup>ヲ</sup>終<sup>ル</sup>字<sup>ヲ</sup>互<sup>ニ</sup>終<sup>ル</sup>韻<sup>ト</sup>

あけりあけりあけりあけりあけり  
あけりあけりあけりあけりあけり  
あけりあけりあけりあけりあけり  
あけりあけりあけりあけりあけり

はれい和候の韻例とありて和歌と又句ありて  
二韻ありて和候の韻例とありて和歌と又句ありて  
君不聞のいふく和歌此ひかくあつたひ  
のいづくは起詠りていひ終るは早急の  
四句二韻といふも色はれり奥儀あり長短奇

のるも換韻の言句も同韻とあつてあつても今  
の論より用ひかゝるふ不ありとあらうと漢家の韻  
例より長篇の文と分論して歌行のれは換韻  
と用ひるに或ると四句一換六句一換八句十句  
ちりも粗あるべし一奥儀のほつら後節あり一はや  
今や和漢の例とすして此借の家此求韻とす  
ちの詩句の尾字と初韻とす一才二才と傳句  
ぬじ一とふれい句と韻とす六句四句と韻と  
換むとさる時次の句は他韻とぬしてその尾字  
と初韻とす一詩句の尾字と用ひるべし

漢家の律法も我々の漢和の語句も  
さうありありて才二才の尾字と初韻とす一詩と  
一篇とす一むつ一韻と用ひるべし一巻の  
換韻は短歌行とす一韻とす一歌仙行と六句に  
韻とす一長歌行と八句五韻とす一詩の法  
六六も六八も七句の時一一篇六章の時ありて  
韻と用ひる換むるべしとあらうと石韻の詩へ中間  
の十句と八韻とあつて假名の二韻十字  
より一詩とす不自然あるべしとあらうと好む  
の詩はとす一但し假名と真名の韻例

あれは例して万葉の韻とかりて先仙陽居の二韻  
 とし月ゆへにむとくは求韻の詠より玉の中古の  
 漢和の不自在なうらう句うに韻字をあはくやう  
 せんうらう史記より他語の平語と夫れを詠言  
 做中の用とすよとせ尚より韻の無細と論  
 ざる初韻と月七花とのうきく無韻いかに  
 玉結玉結なすよとれいさく或とく佳例。妙録。はらうら  
 他語を付し音語からふれい実一同字の論と  
 さとび下りなり和漢の韻例も同韻一同字  
 と用されへ今や他語の韻式もかれとむれとの

無細く同字別吟の例といふも余とす不  
 早むのそきく右例の用持と定格とへ或は備  
 一と同韻と用しつらとく二韻と論るは  
 右と和漢の恒例あり和歌の古はいつ備  
 うと我家の式とらとむと一字係を邦のそ  
 黄山人の筆とくして莫の春とる春秋と此  
 二とより短歌行とて歌仙行と信と後の人  
 後く酒色とく  
 散由壹峯白梅後乙文榊東主人方堅等採  
 毫於觀世音寺之獅子窟二得ハ云

八景卷三

求韻短歌行

香久山のこしらにわすや若花を乳。良壺峯

雪もつゝあ馬折。蓮二

扇とて露くをてふるゝあふく。方壺

湯あもあつたは康とまけ。乙文

雲末を何そと余ふとすあり。二

草刈の穂は橋のあらしへ。峯

山の端北月をらしくとまらまら。文

塵も萩ふく屍のくハ凡。登

将又故入秋とさひきくね老壺。二 峰

た宿もみ石つきくひてあく。登

言をさる人のこころかつりむ。文

ほふるふ船と泳むあらし。二 峰

大坂や中坂と波のまらうれ。文

ひりどからふと云とあひね。峰

只のおも猫めかろひの産と細。文

らり此世やう小岡伽の一桶。登

くろく此くやと調やお脚て。二 峰

染指める此かしくいらく。登

きれとく此化様も水と月此歌  
 縦もほくまを殿もあつらふ  
 せかりし宮へしるのきとあふて  
 前をけりきあふれらる  
 幕ひくむにうけの奥もあつら  
 連歌と奪ふ 子あのみとく  
 二 文 峰 二 文 豎

○係云は行へ連き之能消とやいむ者句と地続の  
 佛割衣と掲めるより一篇を合て姫舞の句は七  
 三とと席の二句にたりて殿のらぬと手懐かた  
 地出たり山へ入舞のあし吹かくる萩のうらぬと殿の

一字とよむおとこをと錯綜して連歌の裁入  
 と例とよむはよる妻の言扱とあつてそれとを  
 舞倒の絶妙と称もくし今もく世々のま行  
 とんねの奉向のまの裁断あり方皇のまの能消  
 の兼前とて此と百世の濫觴とんねの奉向と  
 此式の物結して成すの支配とてあつて幸  
 二句まの頂とあつて黄老人の所法とすれども  
 是かくる此あやまちと道じとあつて蓮二のま  
 ありむしと羽の羽とてあつて圖司あつてと宗に  
 寄衣とて連能の古懐帯とあつてあつてあつて  
 中より宗祇老人のき御の巻と奉向とあつての  
 ちりもやも廟の文とに宗祇の服ありはつて而韻の

八張より七句同じ素春とせりて老人は奉句と  
 らしむるもや老木よむとては向のむけりて  
 思をいし剛よりりて春句のそと再進まき  
 敏捷の妻と我家の替ふく連歌とせり連歌  
 と奪ふし似されく今かく求韻の自在とゆふ  
 て中歳の孔子もかくせんあむ頓挫と能詩の  
 こと地ふれい剛の虚実とおおせりて北行北  
 大膽ちり評者も一投とせりてあしんく今剛の  
 ともや作者も越の石動イスキ後まられし和漢の  
 惜まらして和漢の例より喚て松子岩の石  
 とふも地と文操の選場より慧く庵記  
 といれありとて記し互見を

九折三

廿三

求韻歌仙行

川乙由  
 け秋のるくくうをよまふか  
 赤瓦山よ草の麦のきむれ  
 竹たいて青の園とやうらげりて  
 猫殿あつとそを喉の中  
 一巾の解し草司にねらふ  
 う かくつらうのきまかき  
 ねの本此背のきと括く  
 打らうもよめりの中子

兔土  
 蓮二  
 表如  
 土  
 由  
 如  
 二

八折三

廿三

蓮のあけし葉あけしけを葉弱い  
 葉の中とあつる葉の  
 葉のあけし葉あけしけの  
 葉子のあけし葉あけしけ  
 葉のあけし葉あけしけの  
 葉のあけし葉あけしけの  
 葉のあけし葉あけしけの  
 葉のあけし葉あけしけの  
 葉のあけし葉あけしけの

由二如由士如二士由

蓮のあけし葉あけしけを葉弱い  
 蓮のあけし葉あけしけを葉弱い  
 蓮のあけし葉あけしけを葉弱い  
 蓮のあけし葉あけしけを葉弱い  
 蓮のあけし葉あけしけを葉弱い  
 蓮のあけし葉あけしけを葉弱い  
 蓮のあけし葉あけしけを葉弱い  
 蓮のあけし葉あけしけを葉弱い  
 蓮のあけし葉あけしけを葉弱い  
 蓮のあけし葉あけしけを葉弱い

由二如由士如二士由



好色も二宗華子のまゝの月  
 みるゝつゝと挑灯のつね  
 予編の香も思ふ秋の  
 函のちりしと下れり  
 柳原の園てもかきとまにま  
 いそく心をおぼしてある  
 花のけ糸音とては狂籍より  
 りとむきものいそり尾

如二士由二如由士

○ほいけ行と俳諧之連歌くう一編とあり  
 七縦八横と言語の曲節とありてせはれり所

を合とつて當句の作人とのまゝに  
 撰集の用をたし俳諧も例の製晴あれども  
 ちりまをばねの心とてせしめりけり  
 暮秋のたきとまらねり行の二子とて  
 まれりし十論のる辨も譲りしれり  
 當句のゆりといひ所合のまゝに  
 と承りて例とまはすのちりしと移りて  
 いづれも伊勢の名士ありて由とま  
 て連能行しと傳ありて免と成子  
 あのみ麻のちりし位なりと裁上園  
 ありしをと表如と結城とありて  
 のうことばひて凡雅と俗といひ  
 ちりしを

双六行

華貴人

けせとあつめのね 伏見 じちうは 早稲 さいの團 大和 さいの 双六 さいの  
 折り地のおの老もらうとわらわら 空鐸 さいの 利花 さいの 伴預 さいの 湯折  
 人の信んて 空鐸 さいの 利花 さいの 伴預 さいの 湯折  
 そあや 空鐸 さいの 利花 さいの 伴預 さいの 湯折  
 さいの 空鐸 さいの 利花 さいの 伴預 さいの 湯折  
 のゆ 空鐸 さいの 利花 さいの 伴預 さいの 湯折  
 さいの 空鐸 さいの 利花 さいの 伴預 さいの 湯折  
 て 空鐸 さいの 利花 さいの 伴預 さいの 湯折

四十 何竹 さいの 伏見 さいの 利花 さいの 伴預 さいの 湯折  
 さいの 空鐸 さいの 利花 さいの 伴預 さいの 湯折  
 さいの 空鐸 さいの 利花 さいの 伴預 さいの 湯折  
 さいの 空鐸 さいの 利花 さいの 伴預 さいの 湯折  
 さいの 空鐸 さいの 利花 さいの 伴預 さいの 湯折  
 さいの 空鐸 さいの 利花 さいの 伴預 さいの 湯折  
 さいの 空鐸 さいの 利花 さいの 伴預 さいの 湯折  
 さいの 空鐸 さいの 利花 さいの 伴預 さいの 湯折  
 さいの 空鐸 さいの 利花 さいの 伴預 さいの 湯折  
 さいの 空鐸 さいの 利花 さいの 伴預 さいの 湯折



揚貴妃カ最期ノ地ナリ天竺遺事ニ云々ト按スニカキ  
 以下ハ總テ双六ノ相詞ナリ或ハ相争ノ争ヲ向フニカキ  
 亦トハ最字ナリト云フ亦ナリ或ハ四仕ト連上ハ四ニ  
 手ノ多キ時ナリ或ハ三テ丁目ヲ指テ三ニ垂下ハ連波ノ怨  
 連波ノ拍子ヨリ出ルハト返辭ニ編言セズル文ノ起結ヲ称  
 スキナリ ○西行等ニ世の中といふやういふか  
 かり此やういとあむ思ふを按テ世ノ新古今ニ詞  
 書アリテ江戸ノ君ニ逢ル時ノ贈答ノ歌ナリト云フ  
 〇古今旋の音、まろく、笑、ハ何のせとト讀ル是モ  
 四六ノ相詞ナリ但シ世花ハ梅氏又氏ニ説アリト又貞ノ  
 方ニ定ヘシト云

〇漢文ハ世ノ面影あり文と揚貴妃ノ案  
 前ノ一ヤセト云フハ長歌ノ詞カキ  
 の大格と後文ノ長歌ノ起結ノ形  
 といふて七ノ路ノ措換とト小説  
 の拍子とぬおて今ノ新格ト稱  
 或ハ篇中ノ一ノ句ハ催馬樂ノ例  
 〇真名文字と附くハ文章ニ鎖詞  
 後文ノ訓と極ノ例とあるハ  
 〇連波ノ瀬江のあやう  
 〇あやうにけすと依ていふ  
 〇あやうにけすと依ていふ  
 〇あやうにけすと依ていふ  
 〇あやうにけすと依ていふ  
 〇あやうにけすと依ていふ

我名と例の華表人よゆつるをとりて之を文鑑よ  
る歳行のとき遺稿の所載の文章とをなぐれ各  
と題をりし先師の十名のも一ある一

△大和聯句序 並歌仙行 渡白狂

詩歌者夫風雅之花而所謂詩變而為  
騷騷變而為詞皆可歌自則詩與歌者  
從音訓之違永詩了則曰作若永歌了  
則曰訓歷總者道之優游而遊俗談矣  
語共不忘意之風雅之謂也乎左在則

其詩有聯句而其歌有連言事者從詩  
歌之獨有面白麼我云人云聯其時之  
意也則可弗諸越之人與大和之人為  
物語詩歌矣耶初社月夜兮花且兮見  
給侍人之心心而知召賢教愚也鼻矣  
貫之之詞麼為此意矣手抑鼻聯句之  
始則或曰上則唐虞之賡歌下則漢武  
之柏梁共或曰聯句古無此法自韓愈  
孟郊始共或曰諸公已有聯句之詩謂  
自韓愈始者非也共於茲思聯句之濫

觴則如蘓瞻與蘓由之應對或者四言  
或者六言五言七言有勿論而為言合  
上與下則漢曰聯句居和曰連歌歷古  
集之證文麼教多也左有厚纂為成一  
卷物者但可謂自韓孟始也故左有  
如園鷄納涼者連續一題之意而或者  
成百韻成五十韻言則謂兩吟之詩矣  
其後我朝如江心策度者觀前起後而  
為似今之連俳六譬則如以秋月對山  
堂以梅花對荊棘唯合十二門之名同

而物無體用之差別者字句義暗許之  
黑豆而謂詩歌無姿情之論矣夫先師  
大昔所遊洛之相國寺日有一聯之名  
對鳳兮桐倒掛章知客蝶也妻在周白龍子  
此一對者膾炙其世而稱倒掛與在周  
之意對止乎遺稿魚書二倒掛下東坡詩二出テ鳳二似  
掛此故二名下セリトク在周八齊物論二蝶也覺二在周  
也ト云ハ然ハ在周八即蝶ナリ妻トハ妻化也胡蝶ト云ハ  
例ニ右語ノ款入テハ對ハ五山ノ會合聯句ニ座多子近  
例アリクニシテ對ヨリ名ヲ移シテ以テ妻蝶子ト云リトク  
從是江西南湖南之間金遺聯句之名也其  
與所白龍子與者先師之聯句名也其



後之祿之始也。事在武江之芭蕉庵而  
 素堂與故翁夜話之次撰之日月日記  
 述往古評漢和之為不自在當時論聯  
 句之為不吟味而其夜試有一聯之隔  
 對唐土有芳野櫻將妬海棠素堂揚州  
 無伏見桃被惡山薑白龍子  
○遺稿自書此  
鰲有以故古今集他諸歌摘唐土芳野ト云一本  
ヨリ聯句ノ結構ハ和漢ノ兩用ヲ通スキ及ニソ山薑ハ本  
ニ出テ白木ノ名ナリ揚州ノ産物ナリ柳葉ヲ忌ム物ナリト  
卷ハ此對ノ稱ス前八唐揚國各ヨリ土州ノ地形ヲ對シ増テ  
山海薑常ノ一名ニ用テ附ケタル等ヲ意對トモ字對トモ是  
定規ト共大和ニ聯句ノ鑑トシテト彼記ハ漢和ヲモ論談セリ  
 如斯者我家建詩聯句之一格而和漢

可通做各真名之用為也率哉謂大和  
 聯句者其樣似鳳城之五言聯而全用  
 我朝之俗談居其言學羅山之七字城  
 而爾亦不為者也其意如何也則聯句  
 者本出詩之變律而對其字其字之姿  
 了共不運其題其題之情譬則如以牛  
 對僧以松對鶴句對字對者不及言意  
 對如聯句之作不作了哉然則月尔者  
 有日星之體而花尔者有枝葉之用則  
 倭如玉椿與糸柳漢如山色與水光在

可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>鳥<sub>ノ</sub>之<sub>レ</sub>聲<sub>ヲ</sub>對<sub>レ</sub>梅<sub>ノ</sub>之<sub>レ</sub>香<sub>ヲ</sub>了<sub>レ</sub>則<sub>レ</sub>介<sub>ノ</sub>部<sub>ヲ</sub>隨<sub>レ</sub>類<sub>ニ</sub>  
 而<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>附<sub>レ</sub>分<sub>ヲ</sub>重<sub>レ</sub>毛<sub>ヲ</sub>其<sub>レ</sub>所<sub>ニ</sub>可<sub>レ</sub>謂<sub>レ</sub>聯<sub>ノ</sub>句<sub>ノ</sub>之<sub>レ</sub>註<sub>ニ</sub>  
 用<sub>レ</sub>犀<sub>ノ</sub>故<sub>ニ</sub>于<sub>レ</sub>然<sub>ニ</sub>對<sub>レ</sub>十<sub>ニ</sub>二<sub>ノ</sub>句<sub>ノ</sub>之<sub>レ</sub>字<sub>ヲ</sub>耳<sub>ヲ</sub>則<sub>レ</sub>從<sub>レ</sub>乾<sub>ニ</sub>  
 坤<sub>ノ</sub>時<sub>ノ</sub>候<sub>ノ</sub>之<sub>レ</sub>二<sub>ノ</sub>句<sub>ノ</sub>不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>器<sub>ノ</sub>賦<sub>ノ</sub>食<sub>ノ</sub>服<sub>ノ</sub>之<sub>レ</sub>差<sub>ノ</sub>別<sub>ニ</sub>  
 態<sub>ノ</sub>藝<sub>ノ</sub>虛<sub>ノ</sub>禮<sub>ノ</sub>者<sub>ノ</sub>似<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>名<sub>ヲ</sub>而<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>形<sub>ヲ</sub>而<sub>レ</sub>矣<sub>ノ</sub>今<sub>ノ</sub>也<sub>ニ</sub>  
 我<sub>レ</sub>家<sub>ノ</sub>之<sub>レ</sub>所<sub>ニ</sub>建<sub>レ</sub>者<sub>ノ</sub>如<sub>レ</sub>句<sub>ノ</sub>每<sub>レ</sub>字<sub>ノ</sub>分<sub>レ</sub>姿<sub>ノ</sub>情<sub>ノ</sub>之<sub>レ</sub>品<sub>ニ</sub>  
 而<sub>レ</sub>逐<sub>レ</sub>一<sub>ニ</sub>定<sub>レ</sub>附<sub>レ</sub>方<sub>ノ</sub>之<sub>レ</sub>法<sub>ヲ</sub>譬<sub>レ</sub>言<sub>ノ</sub>則<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>古<sub>ノ</sub>風<sub>ノ</sub>對<sub>レ</sub>新<sub>ニ</sub>  
 月<sub>ノ</sub>此<sub>レ</sub>類<sub>ノ</sub>曰<sub>レ</sub>文<sub>ノ</sub>字<sub>ノ</sub>之<sub>レ</sub>姿<sub>ノ</sub>矣<sub>ノ</sub>字<sub>ノ</sub>面<sub>ノ</sub>者<sub>ノ</sub>對<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>月<sub>ノ</sub>  
 了<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>古<sub>ノ</sub>風<sub>ノ</sub>者<sub>ノ</sub>風<sub>ノ</sub>俗<sub>ノ</sub>而<sub>レ</sub>弗<sub>レ</sub>天<sub>ノ</sub>象<sub>ノ</sub>故<sub>レ</sub>也<sub>ニ</sub>譬<sub>レ</sub>言<sub>ノ</sub>則<sub>レ</sub>  
 以<sub>レ</sub>對<sub>レ</sub>鴈<sub>ノ</sub>對<sub>レ</sub>團<sub>ノ</sub>子<sub>ノ</sub>此<sub>レ</sub>類<sub>ノ</sub>曰<sub>レ</sub>文<sub>ノ</sub>句<sub>ノ</sub>之<sub>レ</sub>情<sub>ノ</sub>矣<sub>ノ</sub>字<sub>ノ</sub>

五字聯

いふにや柑

孫<sub>ノ</sub>香<sub>ノ</sub>と<sub>レ</sub>映<sub>レ</sub>心

猪<sub>ノ</sub>の<sub>レ</sub>尻<sub>ノ</sub>ん<sub>ノ</sub>乳

おと坊

○評<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>け<sub>レ</sub>聯<sub>ノ</sub>と<sub>レ</sub>係<sub>レ</sub>中<sub>ノ</sub>の<sub>レ</sub>合<sub>レ</sub>名<sub>ヲ</sub>入<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>素<sub>ノ</sub>秋<sub>ノ</sub>平<sub>ノ</sub>の<sub>レ</sub>茶<sub>ノ</sub>解<sub>ノ</sub>と<sub>レ</sub>掛<sub>レ</sub>  
 き<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>先<sub>ノ</sub>師<sub>ノ</sub>の<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>子<sub>ノ</sub>と<sub>レ</sub>傳<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>表<sub>ノ</sub>を<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>  
 禪<sub>ノ</sub>に<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>高<sub>ノ</sub>を<sub>レ</sub>あり<sub>レ</sub>け<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>誤<sub>レ</sub>解<sub>ノ</sub>と<sub>レ</sub>れ<sub>レ</sub>今<sub>ノ</sub>の<sub>レ</sub>五<sub>ノ</sub>と<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>  
 とい<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>一<sub>ノ</sub>牧<sub>ノ</sub>の<sub>レ</sub>聯<sub>ノ</sub>と<sub>レ</sub>か<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>亦<sub>レ</sub>や<sub>レ</sub>禪<sub>ノ</sub>室<sub>ノ</sub>の<sub>レ</sub>序<sub>ノ</sub>を<sub>レ</sub>後<sub>ニ</sub>  
 あり<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>遠<sub>ノ</sub>道<sub>ノ</sub>の<sub>レ</sub>子<sub>ノ</sub>僧<sub>ノ</sub>と<sub>レ</sub>打<sub>レ</sub>殺<sub>ノ</sub>と<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>亦<sub>レ</sub>や<sub>レ</sub>一<sub>ノ</sub>聯<sub>ノ</sub>の<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>  
 十<sub>ノ</sub>句<sub>ノ</sub>中<sub>ノ</sub>に<sub>レ</sub>一<sub>ノ</sub>字<sub>ノ</sub>と<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>頭<sub>ノ</sub>の<sub>レ</sub>長<sub>ノ</sub>あり<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>を



○序類

奉<sub>レ</sub>珂憶上人歌序

阿佛尼

北の<sub>レ</sub>山々<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>風<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>き<sub>レ</sub>南の<sub>レ</sub>山々<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>花<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>る  
 う<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>や<sub>レ</sub>西<sub>レ</sub>方<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub> 世<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>字<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>備<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>ス 阿憶上人  
 の<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>つ<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>ひ<sub>レ</sub>玉<sub>レ</sub>ま<sub>レ</sub>ま<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>き<sub>レ</sub>あり  
 の<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>お<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>空<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>上人<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>本<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>り  
 寺<sub>レ</sub>備<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>ス 寺<sub>レ</sub>名<sub>レ</sub>ニ<sub>レ</sub>ヤ 寺<sub>レ</sub>備<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>ス 寺<sub>レ</sub>備<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>ス 寺<sub>レ</sub>備<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>ス  
 の<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>稀<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>園<sub>レ</sub>利<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>よ<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>ゆ<sub>レ</sub>り

武<sub>レ</sub>去<sub>レ</sub>擔<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>回<sub>レ</sub>筆<sub>レ</sub>對<sub>レ</sub>類<sub>レ</sub>初<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>士<sub>レ</sub>麼<sub>レ</sub>備<sub>レ</sub>多<sub>レ</sub>  
 僧<sub>レ</sub>麼<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>著<sub>レ</sub>述<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>平<sub>レ</sub>反<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>殆<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>越<sub>レ</sub>  
 聯<sub>レ</sub>句<sub>レ</sub>物<sub>レ</sub>唯<sub>レ</sub>從<sub>レ</sub>東<sub>レ</sub>冬<sub>レ</sub>至<sub>レ</sub>咸<sub>レ</sub>嚴<sub>レ</sub>迄<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>平<sub>レ</sub>色<sub>レ</sub>  
 之<sub>レ</sub>韻<sub>レ</sub>字<sub>レ</sub>則<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>去<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>說<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>我<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>  
 而<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>理<sub>レ</sub>栗<sub>レ</sub>左<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>姿<sub>レ</sub>情<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>塩<sub>レ</sub>  
 梅<sub>レ</sub>溪<sub>レ</sub>尋<sub>レ</sub>城<sub>レ</sub>南<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>倭<sub>レ</sub>搜<sub>レ</sub>城<sub>レ</sub>西<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>效<sub>レ</sub>韓<sub>レ</sub>孟<sub>レ</sub>江<sub>レ</sub>  
 策<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>達<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>眼<sub>レ</sub>儒<sub>レ</sub>書<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>眇<sub>レ</sub>佛<sub>レ</sub>經<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>混<sub>レ</sub>尚<sub>レ</sub>  
 覺<sub>レ</sub>切<sub>レ</sub>々<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>故<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>古<sub>レ</sub>語<sub>レ</sub>些<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>和<sub>レ</sub>訓<sub>レ</sub>漢<sub>レ</sub>音<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>  
 可<sub>レ</sub>假<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>身<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>與<sub>レ</sub>松<sub>レ</sub>待<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>款<sub>レ</sub>至<sub>レ</sub>則<sub>レ</sub>縱<sub>レ</sub>夫<sub>レ</sub>謂<sub>レ</sub>  
 學<sub>レ</sub>向<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>早<sub>レ</sub>敢<sub>レ</sub>遣<sub>レ</sub>矣<sub>レ</sub>斯<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>學<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>與<sub>レ</sub>

無用了則知詩歌有今日之優游知聯  
句有姿情之品而誠被謂和後之文人  
矣然則聯句之厚用也識論語之所謂  
蒼鳥之名而謂為學文之始終矣夫

聯句歌仙行

郭公松獨立辛頭雙  
橋落雉離卦  
王炊新月字  
始驚山雀  
杜若鶴雙橘尼子  
家榮調肺藏  
筆堀古風薑  
思之隱伏  
痛也木綿裏  
桂川猿有整  
濺渡淺茅荒  
代官停米商  
秋氏螺先茸  
節供化蚌腸橘尼子  
口滑頓為倡  
式師又五郎  
先素竹初株  
世衣韜武光

沽諸茶守袴  
園寺鷄無尾  
顧身浮竹佗  
衛士待油賣  
平家花將敵  
中  
彼岸錢團子芋頭雙  
身負常嚼老  
題鵬源之位  
捧文梅早咲  
姬鑑照親園  
痛也木綿裏  
桂川猿有整  
濺渡淺茅荒  
代官停米商  
秋氏螺先茸  
節供化蚌腸橘尼子  
口滑頓為倡  
式師又五郎  
先素竹初株  
世衣韜武光

鳥藏 三日月

鵲渡 二日星霜

鐘 百白蘆 穂穂尾子

盃 十盃 菊香芋頭雙

句 宮 謔 帚 様

仇 殿 惜 鉉 坊

日 本 治 花 幕

春 初 調 柳 箱

註曰 ▲發端ノ聯ハ全ク大和ノ新格ニシテ郭公ハ和歌ノ情ヲ結  
 杜若ハ俳諧ノ次ヲ余スニ様ハ夙雅ノ本懐ト云ハ本意ヲ深家  
 例ヲ見ルニ生類ト植物ノ對ハ文法詩格ノ常ナルヲ何トテ中古  
 聯句ヨリ古今ノ法格ヲ失ケ然レハ今ノ格スル所ハ郭公ノ松ニ  
 杜若ノ鶴ト當季ノ花鳥ヲ錯綜シテ郭公杜若ノ字意  
 ヲ配リ独ニ雙ノ數量ヲ合セタル一巻ハ今更ニ效トナリ

▲此聯ハ謎文ナリ 離ハ假橋ノ中斷ニ喩ハ肺ハ五臟ノ金ヲ貯フ  
 離火肺金ハ五行ノ意對ニシテ臟ト藏トハ通用ナカラ  
 卦字ニ奇絶ノ對ト云ハ例ノ觀ハ杜若ニ橋ノ一字ヲ  
 合セテ卦各ニ假橋ノ次ヲ見ヘキナリ

▲此聯ハ假對ナラバ凡月ニ大和ノ働ヲ移スレ然レニ百以魚ハレカ  
 上ハ論語ノ詞ニ安ヲ認タル儒者ノ養生ヲ笑ヘルナリ 堀ノ  
 一字ハ筆耕ノ語勢ヨリ當季ニ句作ノ働ト云ク 炊堀ノ  
 意對ニ聯句ヲ尽セリト云ハ 顧ハ分限者ノ自見ナリ

▲此聯ハ俳諧ニシテ移ス所ハ一ト山ハレトノ字對ノ配ヲ見ル  
 一キナリ 論語ニ季子文子之思ト云ルヨリ句情ハ無道  
 ノ世ヲ隱シテ 鱗ノ如ク穴居ストソ邦無道則隱ト云ル  
 字毎ノ裁入ヲ移スレ顧ハ机石ノ山雀ハ龜ナリ

▲此聯ハ古語ノ裁入ナリ論語ニ求善而信  
對ハ小町カ侍ナリ幸都婆少町ニ痛クハ小町カ侍  
ハハ優女トクトアリテ首ニ表ヲ掛スルト食ノ様ヲスリ  
然レ對ノ稱スル所ハ茶ノト木綿トノ俗談ヲ用得テ觀ハ  
但シ牽人躰ト見ルヘシ

▲此聯ハ一巻ノ奇絶ト云シ鶴傳ニ古歌ヲ摘ミ猿登ニ古  
詩ヲ採ル増テ桂川ノ用ヲ評セハ歌仙ハ例ノニ花ニ月ナカラ  
或ハ見渡ニ月ヲ含タシ桂ノ舞情ヲ稱スヘシ去レハ各町ト云  
人名ト云ト下偏カニモ對ノ心得アリテ關ト桂トハ糸ニ主ラ  
對シ寺ト川トハ其名ノ奇ナリ譬言ハ關寺ニ暖城ト對セシ  
ハ中古ノ唐字ト云キヤ觀ハ小町ニ逢坂ノ國ナリ

▲此聯ハ連歌ノ漢和トモ云ハンニ句共ニ詩歌ノ詞ヲ摘テ  
觀ハ人望ノ限ナキ觀相ナリ此等ヲ聯句ノ地ト知ヘシ  
此聯ハ俳諧ニテ衛士ノ油賣ヲ待直ハ四式モ表テ白皇居  
ノ流行様ヲ云ル例ニ所向ノ觀ナカラ待ノ字ニ作者ヲ  
稱スヘシ本ヨリ衛士ト代官トハ官職ノ品ナカラ字意ノ配ヲ  
稱スヘク油ト米トノ附合ハ俳諧ノ笑言ヲ稱スヘケン但シ  
御幸貢ノ玉前ニ米ノ賣買停止ノ制札代官前ノ定法

▲此聯ハ一轉ニテ是ヨリ二折ノ曲節ヲ足シテ厚ナリ平家ニ秋  
申ハ申族ノ意對ニテ花蝶ハ例ノ大和風ナリ去レ佛功徒  
ヲ讚テ譬言ハ蝶ノ花香ヲ賞ルカ如ク由生ハ其徳ニ徇ヘトモ  
曾テ其跡ヲ見スト云ル遺教ノ意ヲ攝スルナリ但シ代官ノ觀  
ニ平家ノ裏ヘテ附スルハ家語ニ苛政ノ諷詞ト知ヘシ  
▲此聯ハ十成ノ俳諧ニテ仏前ノ供物ニ泊ラ置スル彼山岸ノ

殊勝ヲ前セテナリ拜ノ子三作者ヲ看破スレ彼岸ト即供  
 トハ時候ノ對ナカラク多ハ團子ヲ彼岸ト云ク茅卷ト即供  
 ト云ハシカ知レ然ルニ團子ト蚌腸トハ此類ヲ指テ各字對  
 ト云フ去ハ温飢粉ヲ撮入テ蚌ノ核身ニ似タルヨリ其名  
 ラ蚌腸汁ト云ル上之船ノ詞トフ化ストハ雀化蛇ト云ル  
 月令ノ詞ヲ假リテ糝ノ括カケ回カヘタルヲ雜煮ニスルモ独法師ノ  
 七錦シキム立タテテ之シ觀ハ例ノ教ナカラ蝶ニ仏前ノ飾ヲ見ル  
 此聯ハ前ノ負テテ觀テ此躰ヲ削ノ地ト知レ噺ハナシ老ト和歌  
 ノ詞ヲ摘ヒ之シ為信ノハ滑稽ノ辨利ナリ然レハ此地ハ曲節ノ  
 會釈ミテ一折ノ向ニ兩所モ有レシ  
 此聯ハ滑稽ノ觀ナカラ一巻ノ曲トヤ云シ或日政上ノ  
 戲ニ係レ位ヲ勝ントテハ治川チカハ後ノ鞭ヒ火桶ヒツク頼政ト云ル

四品ノ題ヲ入テ一首ニ讀キヤノ仰ラ蒙リテハ治川チカハの  
 舟フネのぬちくおほはる水ミヅ魚イサけさうふらうやまら  
 らむト取アス讀メリトワはれく竹タケ右ミダ左ヒダ殿ノ進マ斷トの  
 便ツ式シキとるトるル衛士ヱシの又マタ足タラシ部ノと仰マシとるルとるルとるルとるル  
 此等コトヲシ字對ノ奇絶ト稱スレシ  
 此聯ハ竹タケ帛ヒトノ詞ヨリ花ハナ枝エダニ文フミヲ附ツルハ全ク林ハヤシ庭ニノ觀  
 ナリ然レニ文フミ素スノ格ハ文フミ教ノニ色イロ字ジノ假對ナカラ粉コ地チ  
 ノ素練ススヲ伊イニテ意對ノ儻タカシヲ稱スキヤ先素ススノニ字ハ  
 周シユ礼レノ詞ヲ轉マ入ル論語ノ朱註ニ見合スレシ  
 此聯ハ全ク俳諧ニシテ趣鑑ニ世ヨ衣ヒノ附合ハ字對ノ中ノ  
 意對トヤ云ハシカハ觀ニ鑑ノ一字ヲ寄テ親オヤジ園ノ古歌  
 ノ裁入ナリ親武オヤジタケ園ノ光ノ輕重チカサヨリ照ア響ヒノ字對ヲ稱スレシ

▲此聯ハ和侯ヲ錯綜シテ別三格ノ備アリト云ハシ史記列傳  
 至長身キナ尺キナ良キナ了キナ截キナトハ韓信カ武功ヲ評シタレハ月ニハ  
 前ノ光キナ字ヲ顧テ聯句ニ附心ノ奇絶ト云シ増テヤ古語  
 ヲ翻轉シテ鳥ノ截キナトハ夕キナ會ノ會釈ナリ物ヲ故古又  
 ヲ株キナリ古語ヲ摘キナク又ハ此節ニ效キナキナリ鶻ノ霜キナハ古歌ノ  
 截キナ入キナリ但キナシ之日キナニ二星ノ如キナキ音訓ノ附合モ亦有キナレシ  
 強テ二星ト和訓スヤラス日。星ハ例ノ假對ナレハナリ  
 ▲此聯ハ句作ノ奇絶ト云シ晨鐘ニ百ハノハヲ殘シテ東キナ白キナ  
 様ヲ云ルルサノ穂ハ橋ノ顧ナリ増テ其對ナリ字ハ時深  
 切ヲ以テ平音ト成セル此等ヲ聯句ノ奇覺ト答キナレシ但シ  
 益キナ花キナ不キナ益キナ香キナト云ル古詩ノ詞ヲ轉シテカラウ白キナ尺キナ四キナニ字  
 ニヤえ教ノ備ヲ稱スレシ

▲此聯ハ名殘曲節ニテ顧ハ所ノ遊宴ナリ世ニ好色ノ徒  
 人ヲ第ト云キナテ某鐘ト云ルハ歌舞ノ地ノ風言ナリ源中ニ  
 向宮ナラハ様字ニ俳倡ヲ尺キナキナト云ハシ此殿ハ願朝ナリ宮  
 殿ノ字對ヲ稱スレシ運生坊キナノ夏ハ少京向答要美ニ更シ  
 ▲此聯ハ録倉ヲ顧テ當時ニ冬平ノ結文ナリ柳箱ハ礼器ニテ  
 重ト羊トニ吉凶ノ沙汰アリ然ルニ此對ヲ穿鑿キナセハ柳箱ハ  
 折節箱キナニテ依主ト自業トノ釈文ニ據ラハ花キナ箱キナニ對ス  
 一ノ花キナ幕キナニ對セナト秋行ノ俳式ニ月花ノ句ハ指テ沉吟  
 セス一塵ノ首尾ヲ先トスレシ然レハ舉句ハ方論ニシテ其日  
 其時ノ用ヲ知テ法ニ泥ヌラ時宜ト云ハ多ニ俳諧ノ法ナリ  
 ヲ知ラハ風雅ハ今日ノ優游ナルヲ知レトフ  
 浮キナ云キナレ一キナ美キナト云ハ所ノ感ナル運テト云レハ其ノ意ハ此ノ如ク

け付の又様、大和聯句の濫ふれど、灯を待最の聯句  
とくくらく、暮句よふおぬく、ま句と揃り、けあよ  
折こころと暮句と對句、こた入替れり、草頭雙と  
連二の聯句、各よして、櫛尾子、こゝ白ねる、暮句、各せ、あつと  
け、實の、暮句、あれい、と、作を、居ね、よ、居の、と、よ、い、え、な  
櫛の子とたつ、れ、と、狐し、櫛尾、これ通、れ、あ、り、  
け、と、暮句、より、聯句、よ、各、あり、し、ぶ、と、と、く、き、聯、と、は、く  
と、と、傳、し、と、の、發、詞、を、ま、曲、の、文、濫、の、傳、類、よ、  
る、る、一、

○聯類

大小聯 並序

藤巴雀

聯とけり、さ、向、傍、より、て、か、あ、り、た、名、の、後、よ、ら、は、  
と、趙、宋、の、比、此、地、を、尋、り、り、様、よ、方、ち、り、と、鶴、い、  
い、ま、も、と、と、聯、と、い、く、仰、園、神、館、の、花、叢、と、  
あ、一、野、店、の、花、の、風、流、と、あ、り、も、あ、り、と、經、書、の、  
一對、う、は、又、の、一、聯、う、と、極、よ、え、り、た、名、の、後、よ、ら、は、  
あ、り、と、聯、と、い、く、あ、ち、り、一、は、れ、と、今、世、の、二、牧、  
よ、う、と、と、一、牧、の、枝、よ、一、聯、の、法、あ、ん、し、一、の、一、言、  
て、み、子、七、字、あ、ん、し、と、今、世、聯、と、い、く、あ、ち、り、と、  
月、次、の、大、小、と、極、の、長、と、裏、と、ん、後、よ、ら、は、と、大、小、額、  
と、い、く、あ、ち、り、の、書、向、よ、け、と、あ、ち、り、の、あ、ち、り、と、

つねづねとて予が為して凡物の地あるをどうも、それ裏の  
題の二子ありとある、く大小の類此二子あると  
ありと摩訶と阿佉との梵語と引、も下二物勃  
はらひて、つれづれととある、きりしとと又、操の  
選場は、つれづれに又選の連珠も又格もつれづれと  
操題もあげ、あるとある、大小、つれづれ、あり、  
類、つれづれ、あり、とと、ある、操、つれづれ、あり、  
新格の番用と稱し、して又、番舎のあら、  
なり、と、あり、と、あり、と

摩訶

一こつんまるく、咲きり

兼此書

阿佉

若菜摘宛、于萬  
八十年、在、布、待、春

○伊比の、つれづれ、あり、  
移と、一減、一集、裏の、二子、題、  
と、つれづれ、あり、と、あり、  
麻と、あり、と、あり、  
つれづれ、あり、と、あり、  
大小の、二子、との、命、を、楚、魏、の、書、司、あり、と、あり、  
凡、物、の、又、あり、と、あり、と、あり、と、あり、と、あり、と



一と文書の優劣とある一演連珠と云ふ類の  
名也格と文選の陸士衡と云ふ一今の序者  
武藤氏より一尾の城下はほろろ春田舎を  
ふらふありと云ふ

園口聯

おとと唐 一 あおれ凡 芭蕉老人

○評云は春のそとと唐のそとと云ふは  
芭蕉庵の扱ひと云ふと唐のまふと云ふは  
唐柿舎の聯と云ふと云ふは  
そおとと云ふは

堪忍聯

字訓詩

張昇角

おはふとて馬しゆれ 了場の標れりと云ふ  
んとんと云ふと云ふは 此の柳の氷より云ふ

○評云此詩は字訓の格と云ふは一とと起語と云ふは  
と措法と云ふは起るの語と云ふは一とと起語と云ふは  
大和の新格と云ふは一とと起語と云ふは

鑑亭聯

東花坊

山とをくらむむと云ふと云ふは

水々近々な月とくく風とく

郭公のお  
時雨の白

そと澄き此あそひ也

いそいでゆいそい電にあそひ  
案いそいでゆいそい電にあそひ

そと澄き平の  
やうくう也

○傳云澄き平と郭の新撰ありて北七里ふふ居  
ありきりにて時雨の言はれとてあそひ板とてあそひて聯と  
あそひとて東濃の野航うして柳雪とて此處と  
あそひとて聯のせよ二牧ありて百世の論とてあそひ  
かんとていそいでゆいそい電にあそひ

面者金不對了共鮮腸者言斐粉之推  
入一則也此外隨字行之輕重而不離姿  
情之二事者爰以郭公之一卷可知大  
和之凡例也初謂古聯句之法者不知  
為孰代誰人之捉凡從五十韻至百韻  
然其今之聯句者長了則之數韻礎自  
有自己之愛栗先者從二十四之短歌  
行用之十六之歌仙行而長其唯可限  
長歌行矣手前則五山之標式亦麼有  
歌仙聯之沙汰與所次謂去嫌之古式



とらや神よ戒の標席ちりまを。むくけぬこい大所  
のろとてら。人の望固ちら色と。あ。き。の。や。は。て  
上人のあくと。誓。より。も。浄。き。て。心。と。か。き。る。は。た。く  
せ。よ。す。れ。な。れ。や。深。く。も。世。の。ち。り。の。底。よ。く。み。れ  
く。る。ま。う。も。お。う。い。ま。も。と。お。も。く。ま。い。ふ。て。違  
の。し。の。あ。と。ら。り。も。ほ。あ。む。お。い。ま。た。た。と。ゆ。り。お。く  
と。る。ら。り。あ。り。

○註曰○又選越身業南枝胡馬嘶北風北風ハ北風也世意故卿  
ヲ思フ其ナリトシ△厚ヲ鳴モ玉鐘モ東ト都トノ枕詞ナリ  
枕詞ノ夏ハ道理有無ヲ論スラス故矣トハ世類ナリトク

○潘河所テ。マの巾とゆるきと人おちけそい  
おれあゝのきつハ水相觀八觀經二十之觀ノニナリ月光  
童子ノ故受アリ細拳ニ反ス△高僧傳惠遠法師勉  
六時孔説ニ其後ニ善道寺大師孔讚ノ偈ヲ佳ホノ給テ  
トフ△阿弥陀經ニ七重行樹皆是四宝ニ同經有七宝池  
八劫流水ニ△無量壽經隨應而現ニ同經而味飲食  
自然盈滿ニ○玉篔簹フラスハ其下ニイ足安ハ山下ニ  
削ニ和歌ノ枕詞ナリ△荀子學不可已青ユキ出於藍コウモ而  
青ユキ於藍コウモ水出於水ユキ而寒ユキ於水コウモ  
○浮ユキふコウモはユキあコウモとユキかコウモのユキ自ユキるコウモもユキ湖南の百老翁ノ秘  
系とくれしとおくしとてしとくかきこみかたれを  
け片の文略と使らんあゝとらに和歌のあきと求

まな歌よりかたむかへしとてちむね向對めはるゝの  
くまのひ糸と渾一と人の風儀と移りてま  
くけぬとていしりあまのちやうくそいひおこる  
他道のうしろして秋家のかみかんをたれくはし梅は  
家一ちち一七律一腫脂のねんけんくは信者と  
藤為相いの母うぐす嘉の後のに條のふら  
二条のふの寄けずあり

蓮逢遊序

中巻序

るに道遠のつよきあるをたててのうらた遊あり  
せとあらずあるはむかへしとてそとそとそとそと

地をそとのてまはするはむかへしとてそとそとそと  
あつた御馬の風はむかへしとてそとそとそと  
既らとの危もあまるといひまれば牛のあつたそとそと  
おつたはむかへしとてそとそとそとそとそと  
かよそとそとそとそとそとそとそとそと  
くらすあつたもむかへしとてそとそとそと  
おつたはむかへしとてそとそとそとそと  
おつたはむかへしとてそとそとそとそと  
おつたはむかへしとてそとそとそとそと  
おつたはむかへしとてそとそとそとそと  
おつたはむかへしとてそとそとそとそと  
おつたはむかへしとてそとそとそとそと

てん桜狩もあまひなまありて川狩もあまふ清浄の  
以て常人とあそぶべしや春の時の大谷とあそぶに  
皆平く天のあそびおぼしき貴族の福と人のくさ  
りさるるまじり

○註曰△直遙遊ノ二字ハ在子ノ篇各ナリ逸註遊者心在天  
遊也△梅スニ此序ハ車濃ノ書文ヲ撰集ニ在子ノ篇各  
ヲ假テ四年ノ狩ヲ分ケ其一篇ノ序詞ナリ羽鳥下ノ詩  
ノ意ヲ運ヘリトフ○詩經ニ寫飛ノ序天魚躍例△列仙傳  
丁固字ニ仙術也鳥白鶴也△仏祖統紀ニ觀音ノ妻ナト化  
シテ馬郎婦ト成玉ヲ奪アリ例ノ十九應身ナリ  
○注云は序ハ今ク在子ノ文也○しるす本も歎め居

富き遊の一子と形容と一丁固一親者との  
心くろこと花子くさ地くくそ端の鼓舞といけいせ  
況や心身の道遠し貴族の親おとされ遊人  
の言ふもはくさくさく例の孤隼とさくさくして例に  
の刀とあそぶく一撰者と又鑑し姓名ありてかりて  
祖又存しやまて柳子の親おとされく享保のころ  
あそぶくはりて道に断絶の歎とほさるるは

二見文基繪序

張昇角

おろけにその浦といせの園北名おせとをその  
面より写してたると名は流連とちりたるとおそは

とかきゝとあしゝ人の心花とさうして我々の心も  
 あきあきとあしゝとあしゝの心花とさうして我々の心も  
 の花とさうしてあしゝの心花とさうして我々の心も  
 盗人の目とさうしてあしゝの心花とさうして我々の心も  
 能者のありのまゝにあしゝの心花とさうして我々の心も  
 如夜もむくむくしてあしゝの心花とさうして我々の心も  
 てたんとあしゝの心花とさうして我々の心も  
 く削のちとあしゝの心花とさうして我々の心も  
 祖のちとあしゝの心花とさうして我々の心も  
 子とあしゝの心花とさうして我々の心も

梅とあしゝの心花とさうして我々の心も  
 も何んをれとあしゝの心花とさうして我々の心も  
 ありつれとあしゝの心花とさうして我々の心も  
 はあしゝの心花とさうして我々の心も  
 らとあしゝの心花とさうして我々の心も  
 もあしゝの心花とさうして我々の心も  
 氣弱とあしゝの心花とさうして我々の心も  
 りとあしゝの心花とさうして我々の心も  
 天下とあしゝの心花とさうして我々の心も

○註句○あしゝの心花とさうして我々の心も

又ゆりねのあつと 西行上人の住す所ハ二見ノ西吹ト云フ里ニ  
 岩ニ扇ヲ敷テ文基トセシ其跡ハ今ニ在リトフ△十論ニ能信  
 一ニ條のほあり 世情の人私とみ論の常は 一ニあり  
 まゝ能信のふとまゝつく 因ハ 一ニあり 能信の辨とまゝ  
 とらゝ △論語ニ繪事ニ後素ト云フ按スルニ此二字ニ結前生後  
 ノ常ナカラ此等ニ文章ノ新結ヲ知レ△海松ニ結前生後  
 ノ繪ナリ然ラフ兩用ニ書スルハ五老井ノ作ナリトフ 硯箱ニ書スル  
 折ニ在リ文基圖ノ下ニ見レ△松梅ノ證文トハ 東書ノ證句  
 一ニあり 一ニ松のぬり上梅の月とあり 按スルニ此東書ニ落  
 ノ折後園ヲ始ナリト云フ五老井ノ云レ圖ハ 松ニ朝日ヲ昏ク  
 一トト 殊色ナラ子ニ紡ハレニ見ニ松ハ論勿クメ梅ニ腫月ノ圖モ  
 アリテ故云羽ノ筆跡ナレトテ其後ハ梅ナリモ昏トトフ

○唐詩ノ言觸弄ニ けりくともよもやまきりのかみあぢる  
 かちののけのあんかきりくと 智多ハ尾張ノ郡ヲ万歳  
 ノ出野ナリ 按スルニ此二對ハ 一ニ命ノ要ナレテ 岩ト扇トノ不形  
 ラ云ナラマタ此序ノ辞宜ラ調ヘタマヒ此文ノ詠諧ヲ入セル  
 字對句對ノ例ノ言ハス又ニ意對ノ絶妙ト稱スレ△夏林廣記  
 繪ノ法格アリ 氣韻生動ハ六法ノ才ニ入る老而簡ハ格  
 ノ才ナリ 細筆スルニ暇アラス △白馬ノ文章訓ニ 能信ノ文章ハ  
 無用ノ用アリテ 合書訴快ハ有用ノ用アリト云フ 按スル詠  
 ハ文字ノ人ノ要言ヲ文章ノ意地ハ此間ニ知キナリ  
 ○浮云は 浮と知内の書り 一ニあり 一ニあり 一ニあり 由來  
 とまゝ 一ニあり 能信の詞をきくと 毛文とまゝの始  
 中後の次才とまゝ 一ニあり 一ニあり 作者と尾符の名讀屋と





く一後とひらりしをばい△幸長茶と名入祖云の歌言  
 たり十論法式下出たり△殿封畧史三金毛九尾野狐  
 ありテ姐已ト化してテ國家ヲ乱セリト細奉ニ及ス△古今集  
 序・秋のゆめ八咫田川ニあつたむおそき命のほろろと  
 んらひ△其のあしとよりゆめのほろろと人おんらひと  
 とのこゝろむゆききり△厚玉ハ夜ト云く團ト云レ枕詞  
 去ルシ有墨ノ詞寄セえ俳諧ノ微中ヲ称スレ世等ハ句對ニ  
 似テ凡是ヲ文對ト知サナリ△芋頭ヲ轉ト成ト芋歸ヲ  
 學ト成セルハ中古ノ檀林嘯ニ在リ物語ノ二字ノ起結ナリ  
 △嘯竹ト百題ノ用ナヤウ嘯ノ一字ヲ夜寒ノ起結ト成セル  
 文ノ斷續ヲ見キナリ

○海云はたつとむすのそくをに一冊の授けの御物

うらこくと華んとをまめもてい能治らんこそあり  
 子やうしてい能の糸より不ハ九尾ノ七尾の詞の富  
 くり四季の化地のあしとくゆひまはるさる能治  
 の百物語してあし一作者と岩城年一して能ヤの  
 七尾ノ七尾と者来よのけろ抄をうろく或は一鬼橋  
 としヤカゆあうと一葉の能將とあし一

愛百合序 並詩

東乙文

我南水陸竹木之花者徒梅也櫻之咲日  
 情藤山吹之春而愛牡丹則思芍药居愛

勇則思水仙歷在者如董大將之所慕  
手習之君愛情者不忌其面影則也于然  
牡丹者被生達魏姚之家而盛李唐之間  
也則房子之障子厭日居薛繪之筆司微  
露而玉妃麼霞湯上之面許殆不耻千金  
之價要從是風通我朝止乎元祿之後者  
被麗而菊之名而牡丹者如有而無也  
增而不染此世之濁蓮花之有仰嗅者  
愛情者例之可識厚哉友在則所我鄉之  
榛菓子者離蓮幽之氣之古風而園植色々

之百合而且培了久灌了不作十二一室  
之襟矣共紅白自有品而如頭插了如居  
照了隨風而有為使地等向了者從本謂  
以花之愛相矣雨有則榛公之所好者和  
漢尋他教奇之色而彼方慕卓文君之前  
金居地方弄木摘花之假看要友有者所  
謂年月厚經了共露不忘給弗其人之本  
情厚耶但者效或法師之物教奇而可謂  
玉色之有色隱者矣乎  
百合不誇蘭菊名自斬芍菜似傾城



たりと捧ふのむねをうけて原身と成るまじき事あり  
 一れとて虚言の程よりしてはれぬのさへ地獄に落ち  
 一とて作を越の石動し後より東と姓より千尋年  
 ありこつて白梅溪と柳号より一箇記不意の博士あり  
 こそと末歌亭下より五ひんと一！

文操卷之三終



(Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the characters '文操' and '終')

